

# 16 世紀中葉における アントウェルペンのイベリア交易

中 沢 勝 三

## はじめに

16 世紀のアントウェルペン市場の興隆と繁栄に対イベリア交易がいかに寄与したかという点についてはすでにいくつかの研究がなされている<sup>(1)</sup>。とりわけ15・16 世紀の転換期にポルトガルの香料交易が及ぼした影響の激烈さについてはつとに知られている通りである<sup>(2)</sup>。しかしながらそれ以外の商品交易を含めた対イベリア交易の実態はさほど知られていない。そこでそのような研究状況の下で、本稿は、アントウェルペン市場においてイベリア交易が有した意義を実証的成果に即して探ることを課題とする<sup>(3)</sup>。

## I

本節ではアントウェルペンとイベリア両国の歴史的関係を II 以下の行論に必要な限りで述べておきたい。

### (i) ポルトガル

ポルトガル商人は他の商人ともども15 世紀の80 年代末にはブリュッヘを離れてアントウェルペンに定着していたが、国王代理人が同市場に居留するようになるのは15 世紀末のこと

---

(1) 主要な著作だけでも以下のものが挙げられる。J. A. Goris, *Etude sur les colonies marchandes méridionales (Portugais, Espagnols, Italiens) à Anvers de 1488 à 1567* Louvain 1925, réimp. 1967; J. Denucé, *Afrika in de XVI de eeuw en de handel van Antwerpen*, Antwerpen 1937; V. Vazquez de Prada, *Lettres marchandes d'Anvers*, Paris s. d.; E. Stols, *De Spaanse Brabanders of de handelsbetrekkingen der Zuidelijke Nederlanden met de Iberische Wereld 1598-1648*, Brussel 1971; H. Pohl, *Die Portugiesen in Antwerpen (1567-1648)* (Beiheft zur VSWG, Nr. 63) 1977.

(2) さしあたり次の拙稿を参照。「アントウェルペンの興隆と銅=香料交易」『文経論叢』14 卷5 号, 1979 年。「アントウェルペンのポルトガル人」一橋大学地中海研究会『地中海地域における集落形成の諸問題』1980 年, 所収。

(3) スペインとポルトガル両国を併せて「イベリア」と表記した理由は特にはないが、強いていえば後述(本稿 III)のデータが両国の交易を合算している点があげられよう。

である<sup>(4)</sup>。そして1503年にポルトガルの最初の香料積載船がスヘルデ河を溯上しアントウェルペン市場の興隆に強烈な衝撃を与えたのであった<sup>(5)</sup>。同市がポルトガル人に対して「ポルトガル館」Huis van Portugalを与えたのは1511年、またポルトガル商人が本格的に同市に来住し始めるのは1520年代以降のことといわれている<sup>(6)</sup>。

ところでポルトガルの香料交易は王室独占で営なまれ<sup>(7)</sup>、1508年にリスボンの「インド館」Casa da Indiaの支所としてアントウェルペンに「フランドル館」Feitoria de Flandersが設置された<sup>(8)</sup>。また同年ポルトガル王室はクレモナ出のアファイタディ Affaitadi 家にアントウェルペンでの胡椒の独占先買権を売却した（1525年頃まで続く）<sup>(9)</sup>。

しかしながらアントウェルペン市場でのポルトガルの香料交易は次第に（特に1530年代以降）減退していき<sup>(10)</sup>、ポルトガルは1549年にアントウェルペンの商館を廃止した<sup>(11)</sup>。

## (ii) スペイン

では次にスペインのアントウェルペンとの関わりを辿ってみることにしよう<sup>(12)</sup>。スペイン人はネーデルラントにおいては14世紀以降ブリュッヘに活動の本拠を置いていたが<sup>(13)</sup>、16世紀に入ってアントウェルペンの繁栄が高まっていくにつれて多くの商人が同市に来住するようになり、カタロニア系スペインの領事館は1527年にアントウェルペンに移った<sup>(14)</sup>。と

(4) アントウェルペンへの外国商人の移住については、拙稿「国際商都アントウェルペンの興隆」『一橋論叢』75巻2号、1976年参照。

(5) ポルトガルの交易がアントウェルペンに与えた衝撃については注(2)で挙げた拙稿を参照。他にこの経緯について、Goris, *op. cit.*, p. 38 ; F. Prims, *Geschiedenis van Antwerpen, VII-2de boek*, Antwerpen 1939, blz. 167; H. Van der Wee, *The Growth of the Antwerp Market and the European Economy*, The Hague 1963, II, p. 128を参照。

(6) Vazquez de Prada, *op. cit.*, I, pp. 157f.; Denucé, *op. cit.*, blz. 79-80. マラノスの流入について次の拙稿を参照。「16世紀マラノス・ナシNaci家の航跡」『一橋論叢』84巻6号、1980年。

(7) Goris, *op. cit.*, pp. 215 ff.; Van der Wee, *op. cit.*, II, pp. 128 f. 国王の代理人は、王室の産物の販売を管理するなどの経済行為を行なった。Vazquez de Prada, *op. cit.*, I, p. 159.

(8) ポルトガルが北西ヨーロッパでの香料の販売拠点をアントウェルペンに定めた経緯と、そこでの南ドイツ産銀銅との結び付きについては、拙稿「アントウェルペンの興隆と銅=香料交易」を参照。他に V. Magalhães Godinho, *L'économie de l'Empire portugais aux XV<sup>e</sup> et XVI<sup>e</sup> siècles*, Paris 1969, p. 492; H. Kellenbenz, 'Wirtschaftsge-schichtliche Aspekte der überseeischen Expansion Portugals', in: *Scripta Mercaturae*, 2 (1970), S. 22 参照。

(9) 注(8)の拙稿の注65参照。但し拙稿で述べた独占権は「香料」全般でなく胡椒についてであること、また1515年に更新されたことを断っておきたい。W. A. Horst, 'Antwerpen als specerijenmarkt', in: *Tijdschrift voor Geschiedenis*, 51 (1936), blz. 333-336.

(10) ヴェネツィア経由の香料ルートの一時的復活と、それ以上に新大陸産の金銀の流入が決定的意味を持ち始めたことによる。前者の点について栗原福也「16世紀後半の地中海とネーデルラント」『一橋論叢』72巻6号、1974年、後者について Magalhães Godinho, *op. cit.*, pp. 492 f.; F. Braudel, *La Méditerranée et le monde méditerranéen à l'époque de Philippe II*, 2de édition revue et augmentée, Paris 1966, I, pp. 495 ff. をそれぞれ参照。

(11) Magalhães Godinho, *op. cit.*, 但し廃止を決めたのは1548年である。Prims, *op. cit.*, blz. 70. なお国王代理人はそれ以後もアントウェルペンにいた。Vazquez de Prada, *op. cit.*, I, p. 159. 1572年の時点でポルトガル商人は同市場に94人いたといわれている。ibid., p. 158.

(12) この項では特に断わらない場合依拠した文献は Vazquez de Prada, *op. cit.*, pp. 160-164 である。

(13) J. Maréchal, 'La colonie espagnole de Bruges du XIV<sup>e</sup> au XVI<sup>e</sup> siècle', in: *Revue du Nord* 35(1953).

はいえスペインの場合はポルトガルと異なり、多数の商人がアントウェルペンに移住した一方で、数多くのスペイン商人の活動はブリュッヘに留まる領事館の統制に服していたのである。

アントウェルペンにおけるスペイン人の活動はどのようなものであったか。まず商人の数であるが、彼らの定住がさかんになったのは1510年代以降のようである<sup>(15)</sup>。ところで1560年頃同市には300人のスペイン人(60家族, 38人の独身者)がいたといわれる。この数はその後減少し、1582年には3~4商会になったが、1585年以後になると再びその数を増し、1593年には9商会に達した<sup>(16)</sup>。

ところでヴァスケス・ド・プラダによればスペイン人の活動は主に商品交易であった<sup>(17)</sup>。彼らはスペインからアントウェルペンに、第一に羊毛を、以下塩、明礬、オリーブ油、果実、鉄塊、コチニール、生姜(香料)、染色用材、皮革、宝石類を持ち込み、逆に同市場からスペインに向けては、亜麻織物、毛織物、タピストリ、高級織物、金属製用具、ろう、穀物、塩漬魚、装飾家具、毛皮、火薬、武器等を運んだという(後述Ⅲ参照)。

## II

ではアントウェルペン市場の交易全体の中で対イベリア交易はどれほどの重みをもつものであったろうか。本節ではこの点について以下 W.ブリュレの作成したネーデルラントの1560年頃の国(地域)別主要商品の輸入内訳を中心としてみていくことにしよう<sup>(18)</sup>。

(14) 15世紀半頃ブリュッヘにはカタロニア系の他に、カスティーリャ・アラゴン系、ビスケー・バスク系の3系統の領事館があった。1530年にナヴァラの領事館が新たにブリュッヘに創設されている。ナヴァラ人は羊毛輸出に従事していた。なお領事はスペイン人コロニーの集會を主宰し同邦人についての裁判を行なった。Maréchal, *op. cit.*, pp. 45-48.

(15) Goris, *op. cit.*, pp. 59f.

(16) *ibid.*, p. 70.

(17) スペイン人の中には石けん製造業など工業活動に従事する者もいた。

(18) ブリュレに以下の論考がある W. Brulez, 'De handelsbalans der Nederlanden in het midden van de 16e eeuw', in: *Bijdragen voor de Geschiedenis der Nederlanden*, 21 (1966-1967); 'Le commerce international des Pays-Bas au XVIe siècle: Essai d'appréciation quantitative', in: *Revue belge de Philologie et d'Histoire*, 46 (1968); 'The balance of trade of the Netherlands in the middle of the 16th century', in: *Acta Historiae Neerlandica*, 4 (1970) が、ここでは主として次の新しい業績による。'De handel', in: *Antwerpen in de XVIde eeuw*, Antwerpen, 1975. なお前記3論文では「ネーデルラント」の表記がなされているが、本文中にも触れるように(彼も明言している'De handel', biz. 123). その大半はアントウェルペンに関わるものであった。なお本表は 'The balance of trade', p. 36の表と同一である。

国 (地 域)	商 品	価 額 (フルデン) <sup>(19)</sup>
ドイツ	ファスチアン	240,000
	ライン・ワイン	720,000
	銅	160,000
バルト海地域	穀 物	3,000,000
フランス	ワイン	1,150,000
	大 青	400,000
	塩	250,000
イギリス	羊 毛	500,000
	毛織物	3,240,000
ポルトガル	香 料	2,000,000
	砂 糖	250,000
スペイン	羊 毛	1,250,000
	コチニール	225,000
スペイン・ポルトガル	オリーブ油	200,000
	塩	175,000
地中海諸国	明 礬	240,000
	南欧ワイン	500,000

ところで本表には最大の価額を示すものと予想されるイタリアの絹・絹製品が推計しえないために算入されていない。そこでそれを補なって（また上記諸国のデータを補正して）各国（地域）からの輸入額を算定すると次のような数値が得られる。

バルト海地域	450 万フロリン
イタリア	400～500 万 <sup>(20)</sup>
スペイン・ポルトガル	450～500 万
イギリス	400～450 万
フランス	200～300 万
ドイツ	200 万

またネーデルラントの輸出を考慮した交易収支<sup>(21)</sup>を国（地域）別に推定すると、大幅な入超を示すのはバルト海地域とイタリアに対してであり、イベリアとイギリスについては輸出

(19) 後注 (32) 参照。

(20) ブリュレは特に推計の根拠を示していないが、グイッチャルディーニの600万フルデンという推計額を目安としているようである。'The balance of trade', pp. 33f. ブリュレの推計の出発点となったのはこのグイッチャルディーニの推計額である。なおブリュレにはネーデルラントのイタリア向け陸上輸出交易の実態を解明した業績がある。'L'exportation des Pays-Bas vers l'Italie par voie de terre au milieu du XVIe siècle', in: *Annales Economies, iétés, Civilisations*, 14 (1959). これによればこの時期約300人のイタリアへの輸出商人が確認できるとしている。  
*ibid.*, pp. 465, 519.

超過が推定されるとしている。またブリュレは、これらの4つの地域がネーデルラントにとって最も主要な交易相手であったと結論している<sup>(22)</sup>。このように彼の推計データによれば、16世紀第1四半期の香料交易ブームの去った世紀中葉においても、アントウェルペンの対イベリア交易はなおかなり重要な部分を構成するものであったと考えられる。

以上のネーデルラントの交易においてアントウェルペンは交易地としていかなる役割を果たしたであろうか。これについて1540年代半頃の輸出統計で同市場の関与を示すデータがある。この史料は1543年2月10日から45年9月22日の間にわたって(1カ年半強)徴収された百分の一輸出税についてのものであるが、徴収総額199,058フルデンのうちアントウェルペンが151,874フルデン(76.3%)であった(以下順にアムステルダム9939フルデン、アラス8520フルデンと続く<sup>(23)</sup>)。

なおここで後段(Ⅲ)との関わりでブリュレの把握するイベリア交易の内容を輸入についてまとめておきたい。彼によればイベリア半島から世紀中葉(実際には1550年から60年頃)年額で、香料が200万フルデン、スペイン産羊毛が125万フルデン、ワイン50万フルデン、砂糖25万フルデン、明礬24万フルデン、コチニール22.5万フルデン、オリーブ油20万フルデン、塩17.5万フルデンがネーデルラントに輸入された<sup>(24)</sup>。

ところで以上みたように、16世紀中葉アントウェルペンの(といってもデータそのものはネーデルラントのもの)交易総体の中でイベリア交易の関与する比率をざっと $\frac{1}{2}$ と見積ることができたが、この時点においては先にみたように(Ⅰ)、同市場におけるポルトガル香料交易の比重は大きく縮小したあとであり、その意味でアントウェルペン交易におけるイベリア両国の関与の歴史的変遷が問題となる。

しかしながら史料上の制約からイベリア交易の歴史的変遷を追跡することができないので、ここでは研究史上明らかにされつつある次の点に言及するだけにしておく。J. A. ヴァン・

(21)「貿易差額」とすべきかもしれないが、まだ国民経済相互間の商品取引を意味する「貿易」の経済環境が現出していない状況なのでこのような用語を用いた。

(22) 'De handel', blz. 124. 但しヴァン・フッテはバルト海交易の比重をさほど大きく評価していないようである。J. A. Van Houtte, 'Anvers aux XVe et XVIe siècles. Expansion et apogée', in: *Annales. Economies, Sociétés, Civilisations*, 16 (1961), p. 263.

(23) 但しこの時期はハプスブルク家の対フランス戦争期に当り(本税そのものがその戦費調達を目的とした)、またイギリス人の取引が免税されていた点などこの史料の価値を減じる制約は存在する。本史料について次の拙稿を参照。「16世紀中葉におけるアムステルダム輸出交易の性格」『一橋論叢』80巻3号、1978年。なおこの輸出税からみた輸出のうち、陸路の徴収総額110,765フルデンで、アントウェルペンを輸出地としたものが87,306フルデンで78.8パーセント、2位アラス8521フルデン、海路による総額88,293フルデンのうちアントウェルペンを經由したものが64,568フルデンで73.1パーセント、2位アムステルダム9939フルデンで、陸海双方においてアントウェルペンの圧倒的比重が推しはかれる。Brulez, 'De handel', blz. 120.

(24) ここでこれらの輸入品の産地と数量を挙げておく。ポルトガルから香料2万キンタル、砂糖1.5万ケース、スペインからは羊毛2.5万捆、コチニール0.5万arobas、両国からのものとしてオリーブ油0.5万pipas、塩2050 cents、スペイン・イタリアからの明礬0.8万ラスト。地中海からのものとしてワイン5000トン。'Le commerce international', pp. 1207 f. なおイベリア半島への輸出についてはブリュレは後段のⅢで筆者が依拠するブリルのデータに専ら依拠しているのでここでは説明を省略したい。'The balance of trade', pp. 39 f.

フッテは1940年代に発表したそのすぐれた業績において、錯綜した諸事実の中からアントウェルペンの繁栄の契機を精緻に辿り、彼のいういわゆる「アントウェルペンを支える3柱」として、ポルトガル、南ドイツ、イギリスの3つの交易の意義を剔出した<sup>(25)</sup>。その後1960年に入ってH. ヴァン・デル・ヴェーは、彼の業績を継承しつつ16世紀アントウェルペン交易史の把握について次のような新しい展望を打ち出した。つまりヴァン・フッテの先の立論を16世紀初頭の契機であるとし、アントウェルペンの繁栄の基盤は世紀の進むにつれて変遷したこと、いかにすれば同市場に第二期の繁栄の基盤が築かれ、イギリスと南欧交易がそれであったと立論したのである<sup>(26)</sup>。いわば同市場の初発の繁栄を生みだした3つの交易のなかで、ポルトガルと南ドイツのそれが後景にしりぞき、替ってスペインとイタリアとの交易が前面に大きく立ち現われたというのである<sup>(27)</sup>。

### III

ではより詳細なアントウェルペンのイベリア交易の実態はどのようなものであったか。本節においては、I・II節における検討を踏まえ、さらにL. ブリルの未刊行学位論文『ネーデルラントとイベリア半島間の交易（16世紀中葉）——統計的試論——<sup>(28)</sup>』の成果に依りつつ、対イベリア交易の実態をみていくことにしたい<sup>(29)</sup>。

#### (i) 史料について

ブリルの用いた史料は、1552年4月から1554年8月にかけて（但しデータの集計の対象としたのは1553年6月末までの15カ月間）、ネーデルラントのイベリア半島（及び母国経由のその植民地）との間の交易に対して課された2パーセント税の帳簿であって、ブリュッセルの王立総合古文書館に所蔵されているものである<sup>(30)</sup>。この帳簿には、商品の送付者の名前毎に、商品の価値、品質と数量、商品を扱った船長名、日付が記載されているが、目的地は必ずしも記されているとは限らない。著者によれば、この史料の記録は信頼するに足るものであり、また港湾の管理も有効であって、記載された商品の価値も実勢に近いもので

(25) J. A. Van Houtte, 'La genèse du grand marché international d'Anvers à la fin du Moyen Age', in : *Revue belge de Philologie et d'Histoire*, 19 (1940).

(26) 彼の独自の貢献について、拙稿「繁栄期アントウェルペンの経済的基礎」『一橋研究』1の1、1976年を参照。

(27) 彼の新しい業績として、'Handel in de Zuidelijke Nederlanden', in : *Algemene Geschiedenis der Nederlanden*, 6, Haarlem 1979. この論文の中でも「南ネーデルラント交易の第二の成長局面」を論じている。なおブローデルも近作でこの点に触れている。F. Braudel, *Civilisation matérielle, économie et capitalisme XVe-XVIIIe siècle*, 3 (*Le temps du monde*), Paris 1979, pp. 124 ff.

(28) L. Bril, *De handel tussen de Nederlanden en het iberisch schiereiland (midden XVIe eeuw)-een kwantitatieve peiling* —, *Onuitgegeven licentiaatsverhandeling*, Gent 1962. 本論文を利用するに当って筆者はブリュレ教授の手を煩わせた。記して謝意を表する次第である。

(29) ブリルの論文も「ネーデルラント」と表題が付いているが、著者自身言及しているように、交易の大部分がアントウェルペンを經由し、その限りで本論文が同市場の交易を対象としたものと考えてよい。なお、以下本論文の内容紹介に当っては特別な場合を除き頁数を明記しない。

あったという<sup>(31)</sup>。

(ii) 商品交易

本稿ではブリルの論文の叙述順序とは逆に商品交易からみていくことにする<sup>(32)</sup>。

A. 輸出：まずネーデルラントからの輸出品であるがその構成は以下のようである。

項 目	価 額	比 率
織 維 製 品	2,193,709 fl.	66.2%
小 間 物	338,623	10.2
金 属	239,481	7.2
油 脂	209,303	6.3
皮 革	52,690	1.6
染 料	30,003	0.9
木 材	18,860	0.6
雑 品	229,738	6.9

みられるように繊維製品の占める比率が圧倒的である。しかも小間物として一括した項目の少なくとも半分は繊維関係の品目とみなされるところから<sup>(33)</sup>、ざっと見積って総額の70パーセント以上が繊維関係で占められることになる。

では以下項目毎にその内容を少しく検討していこう。

まず（繊維製品）であるがその内訳は以下のようである。

品 目	価 額	項目中の比率
亜 麻 織 物	957,271 fl	43.6%
毛 織 物	472,699	21.5
サ ー イ 織	293,304	13.4
タピストリ	176,458	8.0
ファスチアン	111,307	5.1
合 計	2,011,039	91.6

(30) Algemene Rijksarchief Brussel, Rekenkamer (Archives Générales du Royaume, Chambre des Comptes) nrs. 23469-23471. この論文は本文・付録・商品名とも全てオランダ語で書かれている。この2パーセント税は海賊行為に対する武装艦隊の維持費のために徴収された。かつてこの史料を用いたゴリスは商品の数量しか挙げていない。Goris, *op. cit.*, pp. 295 ff. 著者がデータの集計の時期を53年6月までとした理由は、港別のデータが得られることと、その後本税を免除されたイギリス人が交渉が長びいたためこの時期まで暫定的に課税されていたからである。なお筆者もこの史料と同系列の史料を用いてアントウェルペンの海上輸出交易を扱おう論考を企図している。

アントウェルペンの交易史料について次の文献を参照。J. A. Van Houtte, 'Quantitative Quellen zur Geschichte des Antwerpener Handels im 15. und 16. Jahrhundert', in: *Beiträge zur Wirtschafts- und Stadtgeschichte. Festschrift für H. Ammann*, Wiesbaden 1965; H. Pohl, 'Quantitative Quellen zum Handel zwischen Antwerpen und Portugal am Ende des 16. und zu Beginn des 17. Jahrhunderts und Probleme ihrer Auswertung', in: *Economische Geschiedenis van België*, Brussel 1972.

最大の品目は亜麻織物であるが、この生産の中心地がアウデナールデ Oudenaarde であることが、亜麻織物の内容内訳で製造地名が記載されていることから判明する（亜麻織物の32%<sup>(34)</sup><sup>(35)</sup>。もっともこの品目中2位の「ホラント亜麻織物」のように、「ホラント」の呼称を有していながら、実際には南ネーデルラント製であってホラントにおいて漂白された亜麻織物がある場合もあるという（なおホラントは15%、3位はルーアン13%<sup>(36)</sup>）。

2位は毛織物であるが、その製造地をみると、ホラントの比重の方が南ネーデルラントより高く（ハールレムが2位—毛織物品目の一で14%、ロッテルダムが4位で9%）、また外国製はイギリス（11%）を除くと低い<sup>(37)</sup>。以上の2品目で繊維製品の3/5を構成する。

3位はサーイ織 *saaien*<sup>(38)</sup> で、製造地としてライセル *Rijsel* が55パーセント、ホントスホーテが41パーセントと、この両都市が圧倒的な比重をもつ。タピストリではアウデナールデが全体の70パーセントを占め、サーイ織とともに南ネーデルラント製が優勢であるが、次のファスチアンではドイツが大きな比率を占める（アウクスブルク60%、ウルム7%<sup>(39)</sup>）。

次に（金属）であるが、これは原料金属と製品のそれとに大別される。原料（総額159,762fl.）の殆どは銅（86%）で外国産のものである（2位は鉄の7%）。これに対して金属製品（79,719fl.）は大部分ネーデルラント製と考えられる（釘が金属製品の32%、鍋21%、たらい16%<sup>(40)</sup>）。

（油脂）ろうが最大の品目で94パーセントを占め、ダンツィヒとハンブルグの両港から輸入されている（2位はタール3%）。ろうはろうそくの製造に用いられた。

（皮革）この品目で産地を特定できるものは少ないが（バルト海地域が3,393fl.で6%）、

(31) *Bril, op. cit.*, blz. 9.

(32) 個々のデータは全てブリル論文の付録に収められている。*Bril, op. cit.*, blz. 88-171. 通貨はブリルに従ってフロリン *florijn* (= *ponden van 40 groten*) を用いる (1 *pond* = 20 *schellingen* = 240 *penningen*)。

(33) デ・スметは、小間物 *merceries* の中に含まれるものとして、亜麻布やガードル、各種糸などを挙げている。O. de Smedt, *De Engelse natie te Antwerpen in de 16e eeuw*, Antwerpen II, 1950, blz. 104.

(34) 以下（ ）内で%とfl.（フロリンの略号）を用いた。

(35) 亜麻織物は新世界での需要が高かったといわれる（→スペイン→アメリカの経路）。E. Sabbe, *De belgische vlasnijverheid*, I, 1943, n. druk Kortrijk 1975, blz. 261 f.

(36) ブリル論文の付録においては各品目毎に「アウデナールデの亜麻織物」、「ホラントの亜麻織物」というように産地が記され価額が載っている。但し、産地名のない、単なる「亜麻織物」というような記載項目もあり（毛織物以下同じ）、これについては製造（産）地が特定できない。

(37) 毛織物品目中の第1位は *Outrefijnen* で83641フロリン（17%）。

(38) このサーイ織は、「亜麻と木綿を混ぜた軽質の毛織物」で、毛織物の中に含ませるべきかもしれないがここではブリルの分類に従っておく。*Bril, op. cit.*, blz. 173.

(39) 他にブリュッヘ産が少額（2131fl.）だが存在する。ここでファスチアン以下の繊維製品について少し触れておきたい。加工繊維製品80,652フロリン（テーブルクロスがその93%）、キャメロット織44,455フロリン、綿織物20,173フロリン、*Changeanten* 17,554フロリン、オスターデ10,882フロリン等。

(40) J. A. Van Houtte, 'Nijverheid en landbouw', in: *Algemene Geschiedenis der Nederlanden*, IV, 1952, blz. 213-217.

(41) コールネールによれば、16世紀半頃アントウエルペン経由でロシアからフランスに大量の輸入がなされたという。E. Coornaert, *Les français et le commerce international à Anvers*, Paris 1961, II, p. 116.



ロシア産のものが相当の比率を占めるものと推定される<sup>(41)</sup>。

(染料) これは繊維工業用と絵画用に分けられるが、工業用の茜が染料全体の64パーセントを占める。絵画用の染料は21パーセントを占めるにすぎない<sup>(42)</sup>。

(木材) 最大の品目は木樅で(8,367 fl.で44%)、次ぎは腰板で3,172フルデンである<sup>(43)</sup>。このうち産地の記載されているものは少ないが、大部分がスカンジナビア産であろうと推定される。

(雑品) ブリルが雑品とした商品は、主要項目に括れない、多様で、各々の価額が少額の商品群と、他方で史料自体が「諸種の商品<sup>(44)</sup>」と記す143,478フルデン(雑品の62%)の商品群とから成る。しかしながら論文の付録の表から見るかぎりではそれほど多様ともいえない(「諸種の商品」を除いて31種類)。以下1,000フルデン以上の品目を挙げておこう。書籍(14,932 fl.)、亜麻(13,580 fl.)、食料品(7,038 fl.)、家具(7,003 fl.)、トランプ(6,878 fl.)、家具<sup>(45)</sup>(5,150 fl.)、毛皮(5,150 fl.)、包装材料(5,065 fl.)、靴(3,834 fl.)、花飾り(3,760 fl.)、紙(3,065 fl.)、楽器(2,684 fl.)、絵画(1,534 fl.)、道具(1,300 fl.)、ガラス(1,250 fl.)、以上である<sup>(46)</sup>。

ところでこれらの輸出品の77.9パーセントがアントウェルペンから輸出された(ブリュッヘ・ダム12.1%、アルネマイデン3.6%、アムステルダム3.3%、ミデルビュルフ2.2%)。また輸出品中のネーデルラント産の占める比率をブリルは、少なめに見積って64.1パーセントと推計している<sup>(47)</sup>。

B. 輸入：輸入品の構成は以下のようなものである。

項 目	価 額	比 率
香 料	1,190,141 fl.	49.7 %
繊維原料	338,666	14.1
砂 糖	309,762	12.9
油 脂	180,518	7.5
食 料 品	155,197	6.5
染 料 等	121,681	5.1
果 実	59,408	0.5
宝 石 等	9,919	0.4
服 装 品	4,567	0.2
木 材	2,602	0.1
雑 品	23,563	0.9

(42) 工業用染料には、媒染剤の緑青、緑礬等が4403フロリン含まれる。

(43) 造船用材。

(44) 'diverses marchandises' もしくは'toutes sortes de marchandises' と記されている。

(45) この後者の「家具」は一品家具のようである。

(46) 繊維原料の亜麻や食料品を「雑品」に含めることには疑問も残るがここではブリルに従う。

ブリルは、輸入品について植民地産物と非植民地産物に分け、前者が輸入総額中64.6パーセントを占めるとしている<sup>(48)</sup>。以下総額の5パーセント以上を占める項目について少しく検討していこう。

(香料) 植民地産物の香料が輸入の最大比率(50%)を占めるが、輸出における繊維製品ほど大きな比重ではない。香料中の最大の品目は胡椒で香料の87.8パーセント(従って輸入総額の43%)を占める。胡椒については生姜(香料中6%)、肉桂(2%)、丁香(2%)が主要な品目である。

(繊維原料) この項目の殆ど(94.7%)を占めるのは羊毛で(2位は木綿5%)、もっぱらフランドル毛織物工業の原料として用いられたと考えられる<sup>(49)</sup>。

(砂糖) 砂糖は香料に次ぐ植民地産物の大宗で、その最大の産地はサン・トメSan Thoméで全体の51パーセントを占め、マデイラ産がそれに続く(20%)<sup>(50)</sup>(以上ポルトガル)。そしてスペイン植民地産(アンティール)は比較的少量である(10%)。

(油脂)の大部分はオリーブ油(88%)で、2位は石けん(12%)であり、(食料品)中の最大の品目は塩でその56パーセントを占め、2位が糖みつ(22%)、3位が米(18%)で、それ以下は種類は多いが価額は少額である。

(染料他)の中では明礬が圧倒的な比率(94%)を占め<sup>(51)</sup>、コチニール(2%)とブラジル蘇芳(2%)がこれに続く<sup>(52)</sup>。

これらの輸入品総価額の68.1パーセントがアントウェルペンに、24.9パーセントがブリュッヘに受け入れられた(3位はアルネマイデン4.3%)。

### (iii) 商人

では次に(ii)でみた商品取引を担った商人についてみることにしよう。

A. 輸出：イベリア半島へ向けて輸出された商品価額総額3,788,400フロリンの87.4パーセントに相当する3,312,417フロリンの商品について関係した商人を明らかにできる。このうち対象からはずした17,822フロリン<sup>(53)</sup>を控除した価額について取り扱った商人の国別をみると次の表を得る。

(47) ブリルは繊維製品の78.6%、小間物20万fl.、金属の6万fl.、油脂の4000fl.、染料19,146fl.、雑品の半分をネーデルラント産としている。

(48) ブリルは植民地産物として、香料、砂糖、コチニール、木綿、米、ブラジル蘇芳等を挙げている。

(49) J. A. Goris, *op. cit.*, p. 429. 羊毛取引について最近次の研究が現われた。C. R. Phillips, 'The Spanish wool trade, 1500-1780', in: *Economic History Review*, 2nd ser., 42 (1982).

(50) サン・トメ産がマデイラ産よりはるかに安かった。Denucé, *op. cit.*, blz. 32.

(51) 但し明礬は免税品であったのでブリルはこの品目に限り1箱22フロリンを輸入数量(5204箱)に乗じて算定している。価格は帳簿記載の平均。Bril, *op. cit.*, blz. 159 n. 1.

(52) 他の項目について2000フロリン以上の品目を以下項目の順に価額を挙げておこう。(果実)レーズン(29013fl.)、イチジク(11558fl.)、アーモンド(7135fl.)、なつめやし(6779fl.)、オリーブ(4567fl.)、(宝石等)ダイヤモンド(5077fl.)、真珠(2400fl.) (服装品)帽子(4267fl.) (雑品)皮革(5151fl.)、鉄(4912fl.)、毛布(3286fl.)、象牙(2152fl.)。

(53) 商人でなく船長名義でなされた取引高。

みられるようにネーデルラントからイベリア半島へ向けての輸出においては 双方の当事者（イベリア人、ネーデルラント人）の交易が全体の86パーセントを占めている<sup>(54)</sup>。

人数	国（地域）	価額	比率
433	イベリア	2,265,814 fl.	68.7%
314	ネーデルラント <sup>(55)</sup>	590,834	17.9
33	イタリア	145,779	4.4
14	イギリス	108,082	3.3
18	ドイツ	95,970	2.9
8	フランス	2,980	0.1
70	不明	85,126	2.6
890	合計	3,294,585	

ところで著者の集計によれば、主要4商人（取引高6万fl.以上、以下同）が総額の9.8パーセント、主要14商人（4万fl.）が24.6パーセント、主要50商人（2万fl.）が54.2パーセントの輸出を担い、6,000フロリン以上の輸出を扱った主要133商人の取引高が総額の81.8パーセントを占める。従って、残り757商人が18.2パーセントの輸出を担当していることになる（彼らの平均輸出額791fl.）。

さてこの主要商人について国別の視点を導入してみると、最主要的4商人は全てイベリア人であり、主要50商人の内訳は、イベリア36、ネーデルラント6（この最大の商人は Gillis de Sorbrequé<sup>(56)</sup>で55,960fl.を輸出し輸出商人中5位）、イタリア4、イギリス2、ドイツ1（フッガーで6位）、不明1となる。最も多数を占めるイベリア、ネーデルラントの商人は主要133人の中にそれぞれ88人、24人（不明4人）いることから、特にネーデルラント商人について、その圧倒的多数が小規模の商人であることがうかがわれる。なお著者によると小商人は特にゼーラントとホーラントからの輸出に関与する者が多いという<sup>(57)</sup>。

B. 輸入：次にイベリア半島からの輸入に眼を向けてみよう。当該期間における輸入総額2,819,750フロリンのうち、84.9パーセントの2,396,024フロリンについて商品と扱った商人の関係を追跡することが可能であり、このうち商人が担った額は2,330,050フロリンである<sup>(58)</sup>。この商人の国別の内訳は以下の表の通りである。

(54) イタリアへの陸上輸出でも当事者双方の比率が86パーセントを占めた（イタリア185人で総額の63.2%、ネーデルラント56人22.8%、ドイツ人8%、イベリア人5.5%以下略）。Brulez, 'L'exportation', p. 47。

(55) ブリルは「フランドルVlamingen」という呼称を用いて、これが当時ネーデルラント人を意味したと、説明している。Bril, *op. cit.*, blz. 24. n. 6。

(56) Sorbrechtとも綴る。

(57) この点付録のデータには記載がないので確認しえない。

(58) 商人でないものの輸入額が6597fl.存する。

(59) 例えばIIで年額50万フロリンとされた南欧ワインは、ブリルのデータでは240フロリンにすぎなかったがこれはブリルのデータが例外的な年のものであったという。Brulez, 'The balance of trade', p. 29。

人 数	国 ( 地 域 )	価 額	比 率
220	イ ベ リ ア	1,723,831 fl.	73.9 %
18	イ タ リ ア	377,956	16.2
140	ネ ー デ ル ラ ント	182,865	7.8
18	イ ギ リ ス	18,301	0.8
8	ド イ ツ	6,906	0.3
1	フ ラ ンス	828	—
31	不 明	20,363	0.9
436	合 計	2,330,050	

まず輸出(890人)と比べて関与した商人の数が半数と少なく、ネーデルラント人の関与は数で½程を占めながら価額は8パーセントにとどまる。これと好対照なのがイタリア商人である。

では輸出と同様に主要商人の比率を算定してみよう。最主要3商人(20万fl.以上)で35.9パーセント、7商人(6万fl.)で56.1パーセント、主要64商人(6万fl.)で85.5パーセントに達し、残り422人の商人が14.4パーセントの商品を分割していることになる(平均798fl.)。輸出に比べて主要商人の取引高の高いこととその集中ぶりが顕著である。なお最主要商人3人は2人がイベリア人で1人がイタリア人、主要64人では、イベリア53、ネーデルラント6(その最大はスヘツで第21位)、イタリア4、不明1である。

ここで以上みた商人の輸出と輸入について少し別の視角から見直してみたい。それは同一商人の輸出と輸入への関与の仕方についてであるが、輸出商人890人のうち、当該期に輸入を行なっている者が249人しかなく、輸入商人総数(436人)からして、残りの187人の輸入商人は史料に即する限り何らの輸出も行なっていないのである。この不均衡を個別の商人についてみると、例えば有名なフッガーは輸出で5位(輸出額55,703fl.)にありながら輸入額は60フロリンしかなく(第386位)、また輸入7位のスヘツは輸出で21位(差52,839fl.)である。但しヒメネス Francisco Ximenez(輸出8位38,064fl., 輸入14位22,430fl.)やDiege Ortega de Carrion(輸入8位33,223fl., 輸出22位37,879fl.)のようなバランスのとれている商人もごく少数であるが存在する。

#### IV

以上われわれは、I節において歴史的素描を試みた後で、II節でネーデルラントの交易総体の中で——10年程度の視野で——対イベリア交易の占める比重を見、III節において1552～53年の交易の実態を輸出入の双方についてかなり詳細に検討することができた<sup>(59)</sup>。

その結果次のような成果がえられたように考える。第一に、輸出について拙稿<sup>(60)</sup>で実証されたように、このイベリア交易においても、例えば亜麻織物や毛織物、サーイ織について

アントウェルペンがホラントや南ネーデルラント各地（ホントスホーテ、ライセル等）の、さらにはイギリス製造品の中継地となっていたこと、同時にそれらの価額が相当高かったこと、第二に、工業製品だけでなく、バルト海地域のろうや木材など一次産品の中継市場となっていたことが判明した。第三に、輸入において、歴史的経緯に基づく予想を裏切り、16世紀中葉においてもポルトガルの香料がなお大宗の位置にあったこと、同時に香料以外にも砂糖など植民地産物が多額であったこと、第四に輸入品の中に羊毛や染料等ネーデルラントの繊維工業の原料や関係品目が相当の比率を占めていたことも判明した。そして第五にネーデルラント商人の関与した役割が、輸出入双方においてそれほど大きくはなかったものの、従来考えられていたほどマイナーなものでなかったことも判明した<sup>(61)</sup>。

しかしながらブリュレ、ブリルの両者共に提供したデータはネーデルラントについてのものであって、港湾別の比率は得られるものの、港湾それぞれの商品、商人等のデータになっていない欠陥を有する。すなわち、前掲拙稿でみたように、港湾毎に内容の性格の差がかなりあると考えられる状況のもとではやはりわれわれは史料に即してアントウェルペンそれ自体の取引を問題としないわけにはいかないのである。

(60) 「アントウェルペン国際商業の一断面」『社会経済史学』44巻1号、1978年。

(61) ブリュレの'L'exportation'の実証成果以後判明した事実。

≪ RÉSUMÉ ≫

ANTWERP'S TRADE WITH THE IBERIAN PENINSULA  
IN THE MIDDLE OF THE SIXTEENTH CENTURY

Katsumi NAKAZAWA

Antwerp was one of the greatest commercial metropolises in the sixteenth century. The Portuguese spice market had been set up at Antwerp with an eye to deliveries made there of goods from upper Germany. The attraction which German metals held for the Portuguese spice trade thus made Antwerp a world market for tropical products.

Concerning Antwerp's trade with the Iberian Peninsula, Flemish linen was particularly important in Antwerp's export trade, followed by Netherlands and English cloth, Southern Netherlands says, luxuries such as tapestries, and metalwares. Among imports, Portuguese spice and sugar, Spanish wool and Mediterranean alum found an expanding market in Antwerp. At

last Netherlands merchants such as the Schets were actively participating in trade with the Iberian Peninsula and were outstanding among foreign merchants from other countries.